

六本木未来会議

デザインとアートと人をつなぐ街に



CREATOR^{No} INTERVIEW 19

会田 誠 Makoto Aida

1965年新潟県生まれ。1991年東京藝術大学大学院美術研究科修了。

美少女、戦争画、サラリーマンなど、社会や歴史、現代と近代以前、西洋と東洋の境界を自由に往来し、奇想天外な対比や痛烈な批評性を提示する作風で、幅広い世代から圧倒的な支持を得ている。国内外の展覧会に多数参加。

主な展覧会に「六本木クロッシング：日本美術の新しい展望2004」（森美術館、2004年）、「ピリフ」（シンガポールビエンナーレ、2006年）、「アートで候 会田誠・山口晃展」（上野の森美術館、2007年）、「バイバイキティ!!! 天国と地獄の狭間でー日本現代アートの今ー」（ジャパン・ソサエティ、ニューヨーク、2011年）、「ベスト・タイム、ワースト・タイム 現代美術の終末と再生」（第1回キエフ国際現代美術ビエンナーレ、ウクライナ、2012年）など。

また昭和40年生まれのアーティストで結成された「昭和40年会」、美術家の妻・岡田裕子主宰のオルタナティブ人形劇団「劇団☆死期」、小説やマンガの執筆など活動は多岐にわたる。

辛酸なめ子 Nameko Shinsan

1974年、東京都生まれ、埼玉育ち。武蔵野美術大学短期大学部デザイン科グラフィックデザイン専攻卒業。漫画家、コラムニストとして活動。

あなたは六本木を
どうデザイン&アートの街にしますか？

アーティストが六本木に
来やすくなる
オルタナティブスペースを
つくる。(会田)



建物の名前にも駅名にも
デザインという言葉を加えて
呼んでもらう。(辛酸)



No. 19 辛酸なめ子 コラムニスト
NAMEKO SHINSAN / Columnist

会田 誠 美術家
MAKOTO AIDA / Artist

photo_taro hirano / text_tami okano / edit_rhino

2013年の3月31日まで、六本木ヒルズ内「森美術館」で『会田誠展：天才でごめんなさい』が開催中の会田誠さん。対談するのは、漫画家でコラムニストの辛酸なめ子さん。独自の視点で社会現象を追ってきた辛酸さんは、六本木に鋭く切り込み、会田さんにも鋭く質問。まだ未完の作品を抱え「展覧会のことで頭がいっぱい」という会田さんは頭をポリポリとかきながら、六本木をアートとデザインの街にするアイディアを捻り出してくれました。

デザインは乃木坂に、アートは麻布十番に向かう。

会田 誠 僕の案は、使われなくなった廃校などを使ってオルタナティブスペースをつくること。美術館ではやらないような展示ができたり、気軽なカフェみたいな場所ができれば、若いアーティストもこの街に来やすくなるんだろうな、と。まあ、よくあるアイディアだけれど、反射的に浮かぶのはそんな感じですね。辛酸さんだったらもっと奇抜な案が出るんじゃないかな。

辛酸なめ子 いきなりハードルを上げますね(笑)そうですね…… 例えば、ミッドタウンの名前を「ミッド"デザイン"タウン」に変えとか、六本木の駅名も「デザインタウン六本木」に変えてしまう。ちょっとグサイかもしれないけれど、名前に「デザイン」を加えることによって、人々にデザインの街だとインプットされる気がします。

大江戸線って車内で駅周辺の情報もたまにアナウンスしたりしますよね、東洋英和学園はこちらです、みたいな。もし駅の名前を変えられなくても、アナウンスで「次はデザインタウン六本木です」と言ってもらえると、宣伝になるのではないのでしょうか。

あとは、ドンキとロアビルをどうにかすれば……。

会田 え？ ドンキ？

辛酸 デザインされていないグッズがいっぱい売っていたり、周辺の治安が悪かったり、あの辺りから負のオーラが漂ってきているので、隔離するとかどうにかすれば、六本木はもっと洗練されていく気がします。

会田 なるほど～。僕はドンキはいいんじゃないかと思うけどな。そこらへんはアートとデザインって似ているようで水と油なところもあるので、微妙な対立がありますね。アート系の若者はデザイン系が行くようなおしゃれで高いところへは行かず、安っぽそうなところを嗅ぎつけて行くからね。

六本木から乃木坂にかけての辺りが、ちょっとお洒落な感じなのかな。写真家、篠山紀信さんの事務所も近くて、カルチャーの香りがするしね。まあ、確かにそれに比べてドンキのあたりは……好きだけど。だからドンキから麻布十番にかけてはデザインじゃなくてアートが請け負うのがいいかもしれませんね。

辛酸 アート関係の人が集っていたバー「トラウマリス」があったのもあの辺りでしたっけ？

会田 そうだね。芋洗坂のね。あのへんは僕たちにとっても居心地のいいところですよ。

	<p>トラウマリス</p> <p>2008年に閉店した、六本木芋洗坂下にあった12坪のギャラリーバー。来店第一号である、故・岡本敏子さんに始まり、各界のアーティストに愛される場となった、12坪の小さな空間。2010年に恵比寿に移転。</p> <p>http://www.traumaris.jp</p>
-------------------------------------------------------------------------------------	------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

六本木はアメリカと関西の香り？

会田 20代後半の2年間くらい、六本木のジャズレストラン「サテンドール」でウェイターをしていたんです。だから六本木で遊んだことはないけど働いたことはあって、で、僕のイメージとしては六本木ってアメリカっぽいですよね。

辛酸 星条旗通りとかもありますしね。

会田 大使館が近かったり、米軍の施設も残っていたり。米兵はアメリカ人といっても洗練されたニュー Yorker というよりは、粗野なコロラド出身、みたいな感じがするからね。そういう、ちょっとワイルドなところもデザインっぽくないのかもしれないですね。

辛酸 今年の夏に六本木の米軍宿舎で行われている「フレンドシップデー」に行ったんです。米兵が肉を焼いて売っている、みたいなイベントで、確かにみんなワイルド系でしたね。フレンドシップと言いながら、建物の中には入れてもらえなかったんですけど庭園もあって、六本木のこんなに広い土地を米軍が使っているんだ、ってことが驚きでした。

会田 六本木からローカルなアメリカっぽい匂いを消すために、フランス人とかに協力してもらえないかな。

辛酸 街としては神楽坂にフランス人がいっぱいいるらしいのですが、六本木に移ってきてもらいたいですね。

会田 神楽坂の「日仏会館」を六本木に移転するのはどう？

辛酸 それはいい。

会田 あと、話していてちょっと思い出したのは、六本木って東京の他の都市に比べて関西弁の人が多く気がする。これも六本木でウエイターをしていた頃の印象なんだけれど、男の人が大きな声で関西弁を喋っているのをよく聞いた気がするんですよ。ワイルドというか、ギラギラした感じで、米兵と関西弁でダブルギラギラ。そこに軽い恐怖を覚えるんだけど、僕にとっては六本木の特徴であり、面白かったところでもありました。

アートとデザインの街っていう話だからどんどん離れてますね



会田 誠 美術家

MAKOTO AIDA / Artist

辛酸なめ子 コラムニスト

NAMEKO SHINSAN / Columnist

photo_taro hirano / text_tami okano / edit_rhino

国際色豊かなオルタナティブスペース。

会田 オルタナティブスペースの話に戻ると、せっかく六本木なので、国際交流も視野に入りたいですね。美大生が英会話の腕試しに行くような、国際色豊かなオルタナティブスペースだったら伸び伸びと利用する人もいる気がします。秋葉原には「3331 Arts Chiyoda」があるので、差をつける意味でもこっちはインターナショナルでいきます、みたいな。

そんなことを言っている僕自身は、海外とのコミュニケーションを、たぶん、日本のアーティストの中で一番やらないぞ、と決めているタイプなんですけどね。

辛酸 今回の展覧会の会場に掲示されている会田さんの宣言文『いかにすれば世界で最も偉大な芸術家になれるか』にも、英語はやらなくていいって書いてありましたよね。

会田 まあ、あれは、僕の脳みそにはどうしても英語が入ってこなくて、それを自己肯定するために書いたようなところもあり ……

辛酸 私もずっと英語を勉強していたのに喋れないので、ちょっと諦めかけてて、会田さんがやらなくていいと言うならいいのかな、と。あれ読んで安心してたんですけど。

会田 すみません。でも、リアルに若手に言うのは、僕のようになっちゃいけない、と。僕の世代まではギリギリやらなくていい。次からはダメ。好むと好まざるとに関わらず、これからは日本と海外とで総合的に活動するしかない時代なんで、ええ、まあ、それで国際交流もやっ

ばり必要かと。

辛酸 六本木ヒルズのバーとか行くと、外資系企業の外国人がいっぱいいますよね。ハートランドとかフィッシュ&チップスが出るようなバーとか、スポーツバーにもたくさんいらっしゃる。なので、巨大モニターにサッカーやF1を映しておく、外国の方々が集まってくるのではないのでしょうか。

あ、でもその人たちがアート好きかどうかは……

会田 そうなんだよね。「ヨーロッパ人にはサッカー好きとアート好きの2種類がいて、両方が好きというのはめったにいない」という逸話もあるくらいなんだよね。

辛酸 別人種なんですね。じゃあ。サッカー映しちゃダメか……ただ、そういう外資系企業の人の中には、お金に余裕があってアート作品を買いたいという人もいるような気がするのですが、彼らが作品を買いに来られる場所があるといいのでしょうか。

会田 現代美術のギャラリーは、六本木にけっこうあるんです。昔は「細見画廊」や「レントゲンヴェルケ」があったり、最近また「オオタフインアーツ」や「タカ・イシイギャラリー」などのギャラリーがヒルズの近くにオープンしたりしています。

実際にコマーシャルギャラリーがあるかないかで、アートの街かどうかは変わりますよね。世界的に見ると、先端的で野心的なギャラリーというのは、家賃の安い郊外に移動する傾向にあり、郊外のギャラリーのオープニングに車で乗り付ける、みたいなことも多い。でも、日本では地下鉄の駅から近くないとコレクターに来てもらえない、といった事情もあるし、やっぱり都心から離れられないのかもしれない。

辛酸 最初に廃校を活用して、とおっしゃってましたけど、都心部でも「台東区デザイナーズビレッジ」や「世田谷ものづくり学校」みたいに、廃校だったら安く借りられる可能性がありますよね。学校ではないですが、六本木だと、麻布警察署が今度移転するらしいです。

会田 麻布警察署の跡地は高そうだなあ。

辛酸 移転したと知らないで自首してくる人がいると困りますね。

スパを街おこしの拠点&アーティストの居場所に。

辛酸 跡地活用でいうと、以前ヒルズの向かい側に「zaboo」という天然温泉があって、よく行ってたんです。せっかく温泉をひいたのだから、あの跡地をなんとかまたスパとして復活させてほしい。スパがあると、それだけで街に人が来る。都内のスパというと、後楽園の「LaQua」かお台場の「大江戸温泉物語」か、もしくはラグジュアリーなお値段の高い系になってしまう。

街おこしとしてもスパはおすすめです。壁画をアーティストに描いてもらったり、上がアトリエで下がスパ、というのもいいですよ。大竹伸朗さんが香川県の直島につくった銭湯「I♥湯」のようなスパが六本木にあったら、ぜひ行きたいです。

会田 スパをやるなら、水着で男女が一緒に入れてお酒が飲めたほうがいいですね。

辛酸 ミッドタウンに草津から温泉を運んできたらどうでしょう。檜町公園の池を温泉にするとか。ヒルズの毛利庭園でもできるといいですね。



I♥湯

アーティスト・大竹伸朗氏が手掛ける、入湯することも可能な美術施設。絵付けタイルの手法で風呂絵やモザイク画、トイレの陶器などにまで及ぶ。



会田 誠 美術家

MAKOTO AIDA / Artist

辛酸なめ子 コラムニスト

NAMEKO SHINSAN / Columnist

photo_taro hirano / text_tami okano / edit_rhino

持っている要素の幅の広い街。

会田 僕が好きな街はだいたいラテン系で、バルセロナの港の裏にある入り組んだ路地もいいし、ブラジルの貧しいエリアでビールケース並べて昼間っから上半身裸のおちゃんがポケーっとコロナビール飲んでいる感じもいいですね。わりとだらしない、経済的競争から身を引いたよ

うな風情の場所が好きです。

僕自身は日本の北の出身で、性格が根暗なもので、自分に似ている街が好きなら北欧とか、自殺率が高いリトアニアとかになるんでしょうけれど、リトアニアなんて行くと早く帰りたいなあ、って思いますもんね。

辛酸 私は台東区が好きなんです。自分が住んでいるところの近くでもあるんですけど、博物館や美術館がありながら、労働者が集まる場所もあったりと幅が広い。ギャラリーやおしゃれな店も増えてきたりしていて、今後もっと発展しそうだなと思っています。

港区に住んでいるリッチ系の人に話を聞くと、基本的に港区から出ないって言うんですよ。確かに港区は高級感があるし、いい場所だとは思いますが、東京にはいろんな場所があるのにもったいないな、と思ったのと、港区であるここ六本木も、もっと幅が広がればいいのに、という気はします。

ふたりがいま一番気になっていること。

辛酸 私はいつも、世の中のブームや社会現象が気になっているのですが、ここ最近、パンケーキがブームになっているのは何でなんだろう、と。専門店がどんどんできて、食べるために並ぶ店まであるんです。そもそもパンケーキは、炭水化物と脂質と糖質でできていて、食べた直後はテンションが上がるけれど、総合的には身体に良くないと思うんです。なのに、なぜ今、日本人がそれほどパンケーキを必要としているのか。そして、男性は男性で同じようにラーメンにのめり込む。

そう考えると、何か小麦粉に洗脳されているような気がしてきていて、実は、小麦粉に麻薬性というか中毒性があるのではないかと。それが今一番気になっていることですね。

会田 僕の頭の中はいま、展覧会のことしかありません。『ジャンブル・オブ・100 フラワーズ』をはじめ、まだ完成していない作品が3つくらいあるので、それを完成させないと、次のところに行けない。だから気になっていることといえば、早く作品を仕上げたい、かなあ。

辛酸 素人から見ると、『ジャンブル・オブ・100 フラワーズ』は未完成だと分からないんですけど。

会田 あの絵はインクジェットプリントを使って色をのせたうえに、またさらに絵の具で描くという変な描き方をしちゃったので、いい意味でも悪い意味でも、妙なことになっているんです。展覧会に間に合わせ、かつ構図が狂わないようにするために機械の力を借りたのですが、そうすると、最初から色はのっているから、一見できているように見える。でも、本質的には全然できてない。

あれが普通の描き方だったら、できてないところは白いキャンパスのままです。でも今回はそうじゃないから、すごい途中なのに、お客様に見せられるっちゃあ、見せられる状態になっているのが妙に気持ち悪くて 本当の完成までにはだいぶ時間がかかると思います。展覧会の会期中、来年の3月の終わりまでには無理かもしれない

辛酸 作品ができたときがやはり一番嬉しいのですか？

会田 いや、嬉しいのは、作品が完成したときでは圧倒的になく、手を動かす前、最初に発想が生まれたときなんです。今の展覧会に並んでいる絵も、最初に必ず何かのきっかけがあり、これを作るうって思った瞬間があるんですけど、その時に頭に浮かべている完成形は、今並んでいる状態の10倍から100倍は凄いものなんです。これを1作出せば歴史は変わる、くらいの有頂天。その理想がつくる過程でどんどん下がっていき、今回はここまで下がったか という。完成のときはむしろ、苦々しい思いでいます。

辛酸 今回の展覧会では「おにぎり仮面」の存在が、菩薩的というか、とても救いになっているように感じました。

会田 あんまりバランスをとるのが作家にとっていいことかは分からないけれど、会田の展覧会は怖いとか、エグイとかグロイとか言われるばかりだとなんなので、やわらげるのもありかなと(笑)。

で、僕が辛酸さんに聞きたいことといったら私生活。女の幸せとか、どうなんですか？

辛酸 女の幸せ それもむしろ会田さんに聞きたい。幸せな家庭も芸術活動も両立されているのはすごいなあと思うんですけど。

会田 あ、いやいや。

辛酸 なかなか他にいないですよ、両立できている人なんて。

会田 とんでもない。アーティストのベストカップルだったら、大岩オスカー夫妻じゃないですかね。奥様が元学芸員で、結婚したら美術館をやめてオスカーのサポートに専念、みたいな。あと青木陵子さんと伊藤存夫妻とか、ダブルで活躍している方々もいます。

辛酸 そうなんですね。いいですね。会田さんが理想かと思っていたのですが、では、これからはその方々を理想にします。



ジャンブル・オブ・100 フラワーズ

百花繚乱を、無理矢理直訳したという作品。今回の対談の撮影の際、辛酸さんにこの作品の監視員になっていただきました。

取材を終えて

今回で2回目の取材場所となった、森美術館。受付で辛酸さんと合流後、撮影のため会場に入ると、ニコニコしながら自らの映像作品を眺めている会田さんがいました。撮影時にも、不思議な言語を小声で話したりと、まさに会田さんの作品に直結するような、楽しい雰囲気がありました。また、辛酸さんの跡地活用のお話も、それまであった建築物に新たな役割を持たせるという意味でも、街に新しい価値が生まれるきっかけになるのではないのでしょうか。(edit_rhino)